

ライオンシティに集まる個性

ヤング靖子

シンガポールに住む私達は、日本では会えないような友達を作るチャンスに恵まれています。フランス人、イタリア人とタイ人のハーフ、シンガポーリアン、日本人が切磋琢磨しつつ頑張っている場所はどこでしょう。それはシンガポールダンスシアター (SDT) のスタジオです。今月は異なるバックグラウンドをもつ4人の男性ダンサーをご紹介します。連載中に頂いた「男の子にバレエを習わせることのメリットは?」「日本人の子ども達とダンサー達の共通点は?」といったご質問のヒントになれば幸いです。

エティエン(フランス出身 プリンシパル*)

エティエンは自ら望んで5歳でバレエを始めました。医療関係のお仕事をしていたご両親は息子の希望を喜んで応援し、先生の紹介で10歳の時に世界最古の国立バレエ団パリ・オペラ座の付属学校を受験します。世界最高峰のバレエ学校の一つと言われ、受験者の90%が不合格の難関をくぐり抜け、毎年生徒の20%が落第するという厳しいカリキュラムを課す学校での6年間の全寮生活は「100%バレエ漬けの素晴らしい毎日」でした。見事に卒業したものの、その年のパリ・オペラ座の男性ダンサーの募集は1名のみという極端に入団が難しい年で、他のバレエ団のオーディションも不合格が続き暗澹たる思いだったそうです。そんな時、チャリティイベントで偶然シンガポールを訪れ、SDTの芸術監督に紹介され、入団が決まりました。「人生の新しいページが開かれたような開放感があった。」とエティエンは回想します。「チャンスに溢れているシンガポールが大好き。人生をやり直せると言われても、これまでの人生の何一つ変えたいとは思いません。」

シャン(タイ出身 アーティスト*)

バレエの本場フランスで育ったエティエンとは対照的に、シャンが育ったタイにはプロのバレエ団はありません。8歳で習い始めたのは「バレエは全てのダンスの基礎」とイタリア人のお父様が勧めたから。「クリエイティブであれ」と小さい頃から言われたそうです。チェンマイのバレエ教室で男の子はシャンだけでした。プロのダンサーになるために一番の問題は何だったかという問いには、少し考えて、お金という答えが。海外から来た先生の特別授業などはバレエ学校が費用を免除するなど助けてくれ(一時帰国の時にはその学校で教えているそうです)、19歳でバレエを続ける費用を捻出するため、先生の職を求めて来星します。仕事は見つかりませんでしたが、SDTのオーディションを受ける機会に恵まれ、タイで技術に磨きをかけた後、めでたく入団を許可されます。



アマチュア時代の舞台(16歳頃)



休日は友人とのんびり



お母様お手製の衣装で初舞台(5歳)



愛犬と一緒に



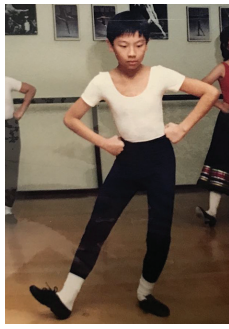
クリエイティブな撮影ショット



2020年「ロミオとジュリエット」ロミオ役

ティモシー(シンガポール出身 アーティスト*)

ティモシーは、ダンスの先生だったお父様に勧められ7歳でバレエを始めました。シンガポール独特の厳しい教育制度と2年間の兵役、彼にとって最大の問題はこのシステムの中で好きなバレエにどう向き合うかだったと言います。除隊後、SDTの奨学生として研鑽を積み、21歳で入団のオファーを貰う一方で、大学にも合格し進路に迷った時、この国では学位が大事だというお父様の助言を受け、大学でエンジニアリングを学び最優秀の成績で卒業します。卒業を前に、バレエを踊りたいとはっきり心が決まり、25歳でSDTに入団。遅咲きのデビューでしたが、インタビューでは人生の一つ一つの岐路で考え抜いて結論を出してきた人の強さを感じました。ティモシーはシンガポーリアンとして、母国のアートシーンに貢献したいという夢をもちつつ、ダンサーとしてバレエを極める日々を送っています。



レッスン風景(9歳)



フラワーアレンジメントが得意



プロのダンサーとして

悟(日本出身 ソリスト*)

昨年4月号の南十字星のインタビューに登場した悟さんは、3歳の時に観たライオンキングに感動したのがバレエを始めるきっかけでした。中学校の教師だったお母様は悟さんの知らないうちに県内のバレエ教室を調べ、9歳になった悟さんが習いたいと言った時に、すぐにレッスンに連れて行ってくれました。「それまで待ってくれた母がすごいなと思います」とは厳しかったお母様について振り返った悟さんの弁。十代でバレエへの思いが揺れた時も、進学で迷った時もお母様は悟さんが自分で答えを出すのを待ってくれました。「自分で決める習慣をつけるように、母は繰り返し僕に教えてくれたと思います」。勉強よりもバレエに夢中な少年は、進学校で級友とうまくいかない時期もありました。けれども、同級生の否定的な態度を嫌だと思つた自分は、逆に言えば何を好きか知っている自分だと気が付いたと言います。その思いを道標にオーストラリアに留学し、卒業後SDTに入団しました。

二つ目は「10年後はどうしていると思いますか?」という問いに明確な答えがなかった事で、ダンサーとしてのキャリアは時間的な限りがあるので意外に感じました。人生のある地点を目指しそこにたどり着くにはと引き算のように時間を過ごすのではなく、バレエに日々集中していれば、その向こうに何かが見えてくるという足し算的な姿勢は、コロナ禍の不透明な時代には清々しく感じます。先々のことなく日々の歩みに集中するのは私たちにも大切な視点だと気づかされます。

シンガポールのもつ多様性がこうした個性豊かなダンサー達を迎える土壌になっているのは間違いありません。バレエの英才教育を受けたフランスのエティエン、プロになるためのインフラがほとんどないタイから来たシャン、シンガポールの厳しい受験社会と折り合いながら夢を叶えたティモシー、日本の大多数とは違う自分の思いに正直に生きた悟さん、世界各地から集まってきたダンサー達が、助け合い一つの作品を創り上げる過程は尊い時間だと思います。

「男性ダンサー達は日々私達をインスパイアします。彼らの強さと情熱とハートに乾杯。そして技を磨き続ける少年たちに乾杯。踊ろう、自分の好きな事を続けよう!」今、進路に迷っている方がいたら届けたいカンパニーからのメッセージです。

*SDTでは主役を踊るダンサーから順番にプリンシパル、ソリスト、デミスリスト、アーティスト、アプレンティスと続きます。

協力: Singapore Dance Theatre, Etienne Ferrère, Shan Del Vacchio, Timothy Ng, 上妻悟, Jason Carter, Adi Global Media Team



「ドンキホーテ」の舞台(11歳)



休日の様子「コーヒー好きです」



2019年、英国のジョージ王子がバレエを習っていることを米国のTVが揶揄したこと端を発し、世界各国のバレエ団が#boys dance tooと投稿した時のSDTのInstagram



小さいお子さんの初めてのバレエ鑑賞
にお勧めの「ピーターとブルーの夏休み」
(オンライン無料視聴)



JCC絆インタビュー
シリーズ(3)、内田千裕さん



2019年「白鳥の湖」ジークフリード王子役

4人のお話には二つの共通点がありました。一つ目は親御さんがバレエを習いたいという息子達の気持ちに寄り添ってくれた事です。夢と呼ぶには幼いくらいの年齢の我が子のやってみたくてを応援する姿勢は、子育てに大事な事だと実感します。そして、その側には才能を見抜き応援してくれる先生もいました。上級の学校を紹介したり、男子一人の環境が居づらくならないように他の教室の先生と連携するなどの細やかな指導、今回インタビューしたダンサー全員、バレエを習っていることをからかわれても気にしなかったと話してくれたのは、身近な大人が応援し、環境を整えてくれたことが大きかったのではないのでしょうか。

著者プロフィール/近況

ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

出会いの豊かさはシンガポール暮らしの醍醐味です。インタビューはそれぞれがインスピレーション溢れる時間でした。日本文化をシンガポールに発信するJapan Creative Centre(JCC)では、プリンシパルの内田千裕さんのインタビューが行われました。じっくりお話を聞くと、旧知の仲でも初めましてのような新鮮さがあり、コロナ禍で「会って話す」時間の大切さを改めて感じます。